

# FACTA

三歩先を読むオンリーワン情報誌 [ザ・ファクタ]

1

2016

JANUARY  
VOL.117

【月刊】



靱井NHKが掘った「墓穴」

創価学会「No.2 粛清」の真相

藤森 LIXIL が姑息な「隠蔽」

# 病院死が減り「大往生」が増えた理由

各種老人ホームでの死亡者数が10年前の3倍の10万人に。日本人の死生観が変わり始めた。



浅川 登一  
Eye  
きた「死のあり方」

長命社会の進展でタブー視されてきた「死のあり方」が、変わろうとしている。尊厳死法などの法整備は停滞しているが、それを尻目に日本人の死生観が大きく変わりつつあるのだ。どこで、どのように死ぬのが幸せなのか。医療任せの終末期が転機を迎えた。明治時代からの日本の死亡数や死因の統計を見ると、1950年には2・6%だった85歳以上の死亡比率が、2014年には42・8%を占める。現在は死者の9割近くが65歳以上の高齢者。死亡原因の統計は、そのまま高齢者の最期の姿と重なる。その死因のなかで、近年「老衰死」が急増している（グラフI）。死因のトップ4はガン、心疾患、肺炎、脳卒中だが、14

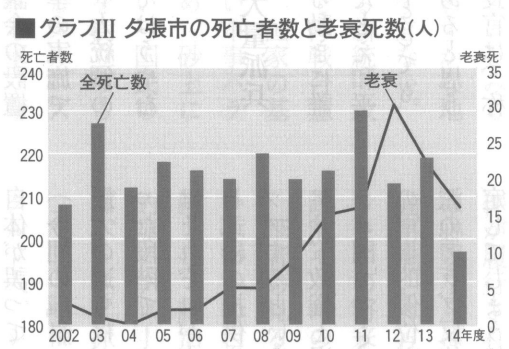
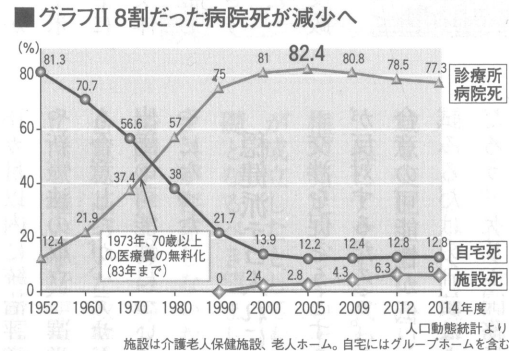
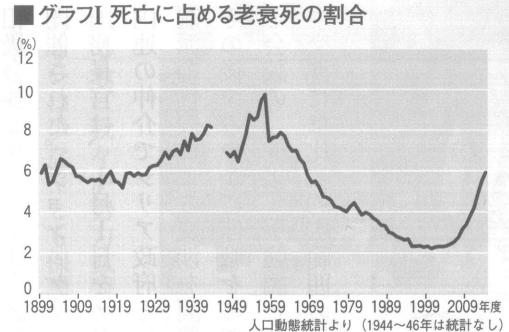
年に老衰死は7万5389人で5位。この10年間で5万人近くも増えている。老衰死とは、全身衰弱による眠るような自然死のこと。過剰な栄養剤や水分補給をする延命治療とは正反対の苦痛のない穏やかな死である。老衰死の全死者に占める割合は明治以来ずっと6%前後で、60年代後半まで大して変わらなかった。それが70年代後半から落ち込み、00年に2・2%まで低下した。それが反転し、14年には5・9%に回復したのだ。この劇的な反転は、死亡場所の変化と関係している。

## 「看取り加算」が追い風

死亡場所の推移を辿ってみよう（グラフII）。驚くのは医療機関での死亡率が10年前からずつと下がり続けていること。実は

世界的には「病院大好きな日本人は死ぬ時も病院」と長い間押されてきた。欧州諸国の病院死比率は50%前後、オランダでは30%を割っている。在宅医療の充実が脱病院となった。日本では05年の病院死亡率が82・4%もあった。それが9年後には77・25%まで落ちた。「病院死信仰」が揺らぎ始めたといえ、画期的な変化である。

家庭電気製品やマイカーなどが一挙に普及した高度経済成長時代に病院死は増え続けた。老人医療費の無料化で病院を利用しやすくなり、終末期を自宅で迎えることが敬遠され、病院死が当然視された。「病院死は家族の最善の対応」とする世間体も後押しした。その「常識」が変わろうとしている。無駄な投薬による延命治療を嫌がる人が



に進んでいる自治体がある。財政破綻した北海道夕張市だ。07年の破綻後、171床の市立病院は閉鎖され、19床の小さな診療所と40床の老人保健施設に変わってしまった。市民は医療に見放されたかと思われた。ところが、その後、劇的な変化が起きた。それまで年間2、3人しかなかった老衰死が20人前後にまで増え、3年前には30人にも達した。特養での看取りも増えた。この10年ほど全死亡者数は200人前後と変わらず、医療機関が縮小したからといって、死亡者が増えることはなかった。診療所の医師や看護師が、訪問診療に熱意を傾けた結果とも言えるだろう。だが、それ以上に在宅医療を積極的に受け入れ

増え、かつては高齢者を前に「病名は何ですか」と医師に聞いただいた家族が、最近では「老衰死でよかった」と喜ぶという。こうした風潮の変化で、医師を煩わせることも減った。では増えた老衰死は自宅での看取りかといえば、事実は違う。訪問診療に熱心な各地の診療所の医師がマスメディアで盛んに取り上げられているが、自宅での死亡者はこの3年間で1356人しか増えていない。現実には、まだまだ自宅を一軒ずつ丁寧に回る訪問診療の医師は少ない。

病院とは逆に死亡者が著しく増えているのは、有料老人ホームと特別養護老人ホーム、それにケアハウスの各種老人ホームである。05年からの10年間で、3万624人から9万9375人へと3・2倍も増加した。介護保険の施行で特養や有料老人ホームが急増。さらに、これらの施設で入居者が亡くなること、介護保険で新たに「看取り

## 夕張市民の原風景回帰

夕張の診療所に3年在職し所長もつとめた森田洋之氏は「ある程度の年齢になればいずれ医療では解決できない問題にぶつかる。それが天命であり老衰、自然死なのだ」と市民の意識が変わり、夕張の街全体の「文化」にまでなった」と指摘している（森田洋之著『破綻からの奇蹟』）。病院が消えたことで、市民の病院依存心がなくなり、死生観の変化をもたらした。人間は死を迎える時に、βエンドルフィンとケトン体により一種の多幸感を得るといわれる。脱水症状で意識が薄れ、安らかに旅立つ。それが老衰死。大往生である。病院が林立する以前は、日本人の自然な風景として、そんな大往生があった。夕張市民は苦境を乗り越え、原風景に回帰しようだ。

加算」報酬がつくようになったことが追い風となった。12年の報酬改定で加算が有料老人ホームにまで広がり、事業者は施設内看取りに関心を高めた。それまでは心身状態に変化があるとすぐ救急車を呼んでいたホームが、一転、看護師の勤務時間を変え、終末期対応に取り組むようになったのだ。

病院死から施設死への移行は、介護保険の成果と見てもいいだろう。不必要な「治療」は行わず、日常生活の延長として旅立つのが、本来のあるべき姿。長

（ジャーナリスト）